



# 図書館だより



2025年  
12月19日発行

秋草学園高等学校 図書館

冬休みは映画・テレビ三昧というのが昭和の時代。令和の今「映像・動画」という分野になって映画やドラマが戻ってきました。そして、原作の本を読んで映像の世界を反芻する時間の使い方をしている人が多いようにも感じます。実際、映画「国宝」が歴代興行収入1位に輝いた今年、原作『国宝』(吉田修一/朝日新聞出版/B913.6-3-1~2/2021年/単行本は2018年)が文庫年間売上1位になっています。

今年は「昭和100年」でした。図書館だよりでは「映画・ドラマの原作」と「時代が一周廻って温故知新・昭和レトロ」を特集してみました。冬休みに映像・動画を鑑賞する手助けになればと思います。

## 冬の映画、ドラマ&アニメの原作

- B913.6-1~4 『イクサガミ』 今村翔吾 // 著 講談社  
(配信 11/13)
- 913.6-3 『人間標本』 湊かなえ // 著 TOブックス(配信 12/19)
- 913.6-7 『この本を盗む者は』 深緑野分 // 著 KADOKAWA(アニメ映画 12/26)
- B913.6-2 『テミスの不確かな法廷』 直島翔 // 著 KADOKAWA(放映 1/6)
- B913.6-8 『愛のごとく』 山川方夫 // 著 講談社(映画 1/23)
- B913.6-1 『終点のあの子』 柚木麻子 // 著 文藝春秋(映画 1/23)
- 913.6-6 『クスノキの番人』 東野圭吾 // 著 実業之日本社(映画 1/30)
- B913.6-1~3 『ほどなく、お別れです』 長月天音 // 著 小学館(映画 2/6)
- B673-2 『エンジェルフライト』 佐々涼子 // 著 集英社  
(配信 2/13)
- 913.6-4 『木挽町のあだ討ち』 永井紗耶子 // 著 新潮社(映画 2/27)
- B913.6-1 『君が最後に遺した歌』 一条岬 // 著 KADOKAWA(映画 3/20)

## 2025年これを読まずに終われない

- 913.6-1 『#真相をお話します』  
結城真一郎 // 著 新潮社

大森元貴/菊池風磨主演映画の原作です。映画はひとつのストーリー、本書は短編集、どこが違うのか読み比べてみてください。当図書館の今年の貸出回数No.1で、読んだ人同士で見解を議論するのもよいかもしれません。

## □ 司書の今月はこの本読みました

本を読まない司書ですが、今月は芋づる式に3冊読んでしまいました。まず、鉄道好きの観点から『西武池袋線でよかったね』(杉山尚次/交通新聞社/S291-1)をルンルンと読み始めたら、なんと鉄道の本ではありませんでした。地域社会学・歴史学の本で、東京都多摩地域について、小難しい史観は避けつつ参考文献はしっかり記述され、気軽に当地の社会・歴史に触れられました。

また、昭和時代の話に引き込まれ、上述『不適切な昭和』で記憶の確認をしました。さらに、「村上春樹のピンボール」という項目で、『読めない人のための村上春樹入門』(仁科千香子/NHK出版/S910-2)に芋づるしました。こちらは学術的な内容ですが、「村上春樹」を読み切れない人、読んだ内容を思い出せない人(←司書)にとって、とてもチートなツールとなっています。村上春樹については、読者の数だけ評論家がいるといわれますが、おおきな後ろ盾をもらったような一冊になりました。



## 昭和レトロな手作り

- 594-オ 『手縫いでちくちくどうぶつぬいぐるみ』 文化出版局
- 594-ニ 『みんな大好き!アンパンマンのフェルトマスコット』 日本ヴォーグ社
- 594-テ 『サンリオキャラクターズのフェルトマスコット&リース』 アップルミンツ

以前は、バッグにつけるチャームは「彼氏がクレーンゲームでとってくれたの」を暗に主張するツールでしたが、昨今、「自分で手作り」がまま見られます。ああ、昭和のころの純真な高校生が戻ってきたんですね(昔を思い浮かべる司書)。

図書館には手芸の本がたくさんあります。

## 新着コーナーの気になる本

- S210.7-カ 『不適切な昭和』  
葛城明彦 // 著 中央公論新社

「ふてほど」が社会現象になった2024年のテレビドラマ『不適切にもほどがある!』のスペシャルが1月4日に放映されます。昭和を知る人には「うんうん」でしたが、

昭和を知らない世代はどのように解釈されたのでしょうか。本書では「信じられない」昭和時代を知ることができます。1項目が1~3ページ、簡潔で1分程度で読めます。おじいちゃん・おばあちゃんとの会話のとっかかりにもどうぞ



【横闇】